



ktunes
RACING

🇯🇵 M.NITTA 🇯🇵 Y.NAKAYAMA

Super GT 2018 Rd,4 Chang GT Report 2018/7/1

Final Day Summary

5番手からスタートしたK-tunes RC F GT3だったが
選択したタイヤが本来のグリップを得られなかったため
ラップタイムを上げることができず、最終的に10位でフィニッシュ

Final Day

3年ぶりに開催時期を変更して SUPER GT シリーズの第4戦として実施されることになった
「Chang SUPER GT RACE」。

K-tunes RC F GT3は、6月30日（土）に実施された公式練習では、新田守男選手が19周、中山
雄一選手が24週の計43周を走行。結果は、新田選手がマークした1分33秒116がベストタイム
となり10番手となった。突然のスコールによってウエットコンディションとなった予選Q1では、
最終ラップでベストタイムを記録して辛くも13番手で予選Q2に進出。スリックタイヤを履いた予
選Q2では、1分33秒110を記録して7番手となった。しかし、予選後の車検で上位2台に車両規
定違反が見つかったため、2グリッド昇格し5番手から決勝レースを迎えることとなった。

予選日から一夜が明けてチャン・インターナショナル・サーキットは、早朝から晴れ渡るととも
に強い日差しが差し込み、正午には気温が33℃まで上昇。前日に引き続いて、ドライバーとメカニッ
クには厳しい戦いが予想された。

昼前から始まったピットウォークの後には20分間のサーキットサファリが実施され、その後には
20分間のウォームアップも設けられていた。決勝レース前の貴重な40分間の走行は、新田選手が
最終的なセットアップなどを確認。サーキットサファリでは11周、ウォームアップ走行では12周
を走行した。ウォームアップ走行でのベストタイムは1分34秒380で、11番手の結果となった。
心配されていたスコールもなく決勝レースは、予定通りの15時にフォーメーションラップによりス
タート。チームは戦略の幅を持たせるために、ライフの長い硬めのスリックタイヤを履いてK-tunes
RC F GT3をコースに送り出した。

Final Day

スタートドライバーを務めた新田選手は、1周目に1つポジションを落として6番手となるものの、その後は思ったようにペースが上がらない中でも巧みなライン取りで後続を抑え込み順位を守っていく。13周目には、7周に渡って押さえ込んでいた31号車プリウスの先行を許してしまうが、それでも7番手で20周目を迎える。21周目になると上位陣が徐々にピットインしてドライバー交換の作業を行なっていく。K-tunes RC F GT3は、ピットインのタイミングを引っ張る戦略を採っていたので、23周目には4番手、24周目には2番手まで浮上する。その後は、こちらもピットインのタイミングを遅らせた87号車と88号車のランボルギーニとのバトルになり、先行を許すもわずかなタイム差で続き、新田選手は38周目にピットイン。タイヤは前半のスティントで使用したハードからソフトに交換し、給油を行なうとともに中山選手にドライバーチェンジしてコースに復帰する。43周目には走行している全車がピットインを終え、この時点でK-tunes RC F GT3は11番手を走行。前走車は7号車のポルシェで、後ろからは34号車のNSXが迫り、3台はテールトゥノーズの状態でも周回を重ねる。34号車はウエイトハンデが軽いこともありコーナーからの立ち上がりやストレートスピードに勝っている。中山選手は10周以上に渡って押さえ込むが55周目に抜かれてしまう。だが、2号車のマザーシャシーをパスしたことで11番手をキープ。このままポイント圏外でレースを終えるかと思えたが、58周目に2番手を走行していた55号車のBMW M6 GT3がトラブルによって後退したため、60周目に10位でチェッカーを受けた。

前戦の鈴鹿サーキットラウンドでは初優勝を遂げたK-tunes RC F GT3だったため、タイラウンドでも上位に入ることが期待された。そして決勝レースは5番手でスタートしたものの選択したタイヤがコースコンディションと合わずにラップタイムではライバル勢に離されてしまった。しかし、シーズンを考えると貴重な1ポイントが獲れたことが救いといえる。



Team Comment



Director : 影山 正彦

レース序盤は硬めのタイヤを選択したので、ライバル勢に対して遅れをとることは想定内でした。その苦しい状況の中でも新田選手は踏ん張ってくれて順位をキープしてくれました。しかし、先行したマシンにタイム差を付けられてしまったので、後半のスティントで追いつくことができませんでした。最後は、55号車にトラブルが発生したために10位でフィニッシュできたことが幸いです。今回は、公式練習でタイヤ選択を見極めることができなかったことが、決勝レースでの苦戦に繋がりました。次戦以降は、持ち込みのタイヤを決勝レースやコンディションを想定したうえで判断して、最適なモデルを選べればと思います。



Driver : 新田 守男

ウォームアップのときにも感じていたのですが、タイヤのグリップレベルがあまり良くなく、それが決勝レースでも同様となりました。K-tunes RC F GT3は、高速コーナーを得意としているのですが、苦手の低速コーナーでライバル勢にパスされてしまい苦しい展開でした。担当したスティントは38周目まで引っ張ったのですが、もう少し早くピットインしていた方が良かったかもしれません。影山監督とも話しましたが、今回はタイヤチョイスを失敗してしまいました。次戦以降は、チームやタイヤメーカーとしっかりとコミュニケーションを取って、最善の策で戦っていければと思います。



Driver : 中山 雄一

後半のスティントを担当したのですが、新田選手が履いたタイヤとは異なる柔らかめのモデルを選びました。内圧が上がりきるまでは、車重やガソリンの重さが影響してペースが上げられず、最初の数周は苦しい状況でした。また、前戦の鈴鹿ではコースコンディションに合わせてセットアップが出来て一発の速さも持っていましたが、タイヤのコンディションには合わせ切れませんでした。そのため、コーナーでの速さが足りず、ポジションを競い合っていた34号車にも最終的に抜かれてしまいました。10位でポイントを獲得したことは、シリーズとしては良かったと思いますが、さらに強くなるために戦略やセットアップを見つける必要があります。

2018年スーパーGT レーススケジュール

▶ 8.4-8.5 Round.5 Fuji